

## 海外レポート

## 中国で開催されたアジア・太平洋公衆衛生学校 コンソーシアム総会並びに学術集会

琉球大学理事・副学長  
外間 登美子

2013年のAPACPH（アジア・太平洋公衆衛生学校コンソーシアム）は、アジア太平洋地区の公衆衛生学校のネットワークで1984年にハワイ大学にて発足した。現在アジア太平洋地区の23か国80校がメンバー校で、そのうち日本のメンバー校は6校となっている。その年次総会と学術集会が中国の湖北省武漢市（ホスト校は武漢大学）で10月24日～27日に開催された（写真1）。APACPHの中国開催は今回が3回目（1回目は北京、2回目が上海）であった。上海大会はSARSのため当初の予定の5月に開催できず、10月に延期して実施された。最近是我が国と中国の関係も尖閣問題等の影響でぎくしゃくとしている。武漢が歴史的に抗日戦争の拠点であったこともあり、初めての武漢訪問は不安と緊張を感じていた。さらに最近のPM2.5問題もあり、マスクを持参した。中国で国際会議を開催するにはなかなか難しい側面もあったので、無事に開催できたことが一番嬉しいことであった。

学会場は武漢大学のメインキャンパスにある人文館であった。大学構内には学生寮が立ち並び、福利施設街もあった。学生と教職員の昼間人口は5万人以上と推察される。

会議のテーマは”The Challenge for Global Health“で、プリナリーセッションのキーノートアドレス5題（香港中文大学学長、初代CDC総長、中国医学ボード会長、というシンプルな構成であった。25のサブテーマのシンポジウムにはそれぞれキーノートアドレスと一般演題から構成されていた。

主なサブテーマは母子保健をはじめ、ミレニアム開発目標とポストミレニアム開発目標、災害と国際

協力、保健教育と健康推進、老年保健、タバココントロール、AIDS予防とコントロール等であった。

オーガナイズングコミッティーによると、30カ国から1000を超える演題の応募があり、その中から179題の口演、408題のポスター、計587題の演題が採択された。演題数が最も多い国は中国172題、インドネシア119、マレーシア75、タイ38、米国34、スリランカと台湾がそれぞれ33、韓国16、日本15、インドとオーストラリアがそれぞれ14、香港13、バングラデシュ11の順であった。フィリピン、フィジー、ネパール、シンガポール、カザフスタン、グルジアからも演題があった。

今回は日本の演題数が少なくなっており、Guest lecturer 2題、oral 5題、Poster 8題の計15題であった。日本の場合、APACPHメンバー校以外の参加が比較的多いのが、今回の特徴のひとつであった。また、小児保健に関する演題は先天異常、母乳栄養、小児歯科保健、肥満、学校保健、いじめ、思春期の精神衛生等の70題であった。

母子・思春期保健はそれぞれシンポジウム10題と31題であった。そのうち、私はSYM 10 Maternal, Child and Adolescent Healthの座長を分担した。招待講演のテーマは“Pre-conception Health and the Prevention of Birth Defects and Developmental Disabilities”（Dr Edwin Trevathan、米国デューク大学）であった。Dr TrevathanはMPH取得後に脳神経専門医になった方であった。

一般口演は5歳未満死亡率（インドネシア）、ライフスタイルと妊娠糖尿病（中国）、受動喫煙（中国）で英語と中国語によるDiscussionとなった。

現在、APACPHには5つのコラボレーション拠

点があり、それぞれが分担のシンポジウムを担当してきた。琉球大学はIsland HealthとIsland Health Symposiumの基調講演と座長を分担した。アジア・太平洋地域にはインドネシア、フィリピンなど島嶼を抱える国や、島嶼国も多い。その保健システムや、抱える問題は国により大きく異なっており、Island and rural healthの成功例から学ぶことがシンポジウムの目的であった。「沖縄の保健医療」、「マレーシアサバ大学（カリマンタン島北部）の僻地保健医療教育」、「モルディブの島嶼における保健医療人材」が紹介され、沖縄県の保健医療人材養成の歴史が注目された。

人口13億の中国はGDPですでに日本を抜き、独自の有人宇宙船打ち上げに成功した。スーパーコンピューターも日本を抜いた。一人っ子政策による人口構造パターンの変化も懸念される。急速な工業化による大気汚染は季節風により日本にも影響を与えている。中国の大気汚染は地球環境問題に直結するものである。武漢の空の色は灰色、夜空の星は小さく見えた。武漢大学には中国で初めてのGlobal Health Institutionが設置され、ハワイ大学公衆衛生学科と学術交流が進んでいる。環境問題に関する共同研究も報告された。宿泊先のホテル玄関の2組のシーサーに中国の大気汚染を飲み込んで浄化して欲しいものである（写真2）。最後の夜は武漢大学に招かれ、構内レストランでJapanese brother and sisterと呼び口上をのべてはお酒を飲むという宮古のオトーリそっくりのおもてなしであった。夜の武漢大学構内は明かり（屋外灯）が少なく暗く、

昔の首里の街のたたずまいと同じ雰囲気のようにあったが、暗い中でよく見ると人の流れは多く、道路には多くの大学生があふれていた。中国がGlobal Healthの面からも責任ある大国になって欲しいと願いながら、帰路は上海経由で帰国した。



写真1 中国で開催されたアジア・太平洋公衆衛生学校コンソーシアム総会



写真2 ホテル玄関のシーサー